The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	物質文化展示の新たな可能性について ： 国立民族学博物館南アジア展示場を事例に
Author(s)	上羽, 陽子
Citation	デザイン理論. 2017, 69, p. 76-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65028
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

物質文化展示の新たな可能性について
── 国立民族学博物館南アジア展示場を事例に

上羽陽子／国立民族学博物館　文化資源研究センター

１．はじめに

国立民族学博物館（以下，民博）は，2009年より本館展示場の改修を開始し，2016年６月にすべての展示場の改修を終えた。2015年３月19日には，南アジア展示場も約20年ぶりに全面リニューアルをした[1]。

発表者は2008年より民博にて文化資源である現地の人びとのものづくりに関する知識をどのように活用することができるか，展示やワークショップを通じて研究を進めてきた。

これらの経験を踏まえて，発表者は南アジア展示改修において，「染織の伝統と現在」のセクションを担当し，南アジアの特徴的な染織技術を紹介する「染織技術解説パネル」を企画・制作した。本発表では，刺繍や染め，織りなどの手工芸技術とその素材を網羅的かつ立体的にとらえることができる「インデックス展示」を通して，物質文化展示の新たな可能性を提示する。

２．南アジア展示場

改修した南アジア展示場は，これまでの宗教をメインにした精神世界を強調した展示から，めざましい経済成長を続ける南アジアの人びとの営みの多様性に焦点をあてた展示へと新しくなった。展示場は「躍動する南アジア」，「宗教文化－伝統と多様性」，「都市の大衆文化」，「生態となりわい」，「染織の伝統と現代」の５つのセクション構成となっている。

３．民族資料としての染織品展示の問題点

発表者は，南アジア展示改修において，既存の民族資料としての染織品展示の問題点を解決すべく，以下の４点に焦点をあてて，展示を構築した。

１）間近で資料をみることが可能な展示設計
２）基礎的な染織用語の解説
３）生産現場の歴史的・社会的背景を紹介
４）素材・道具・技術工程を明示

４．「染織技術解説パネル」

民族資料としての染織品を展示する際に，専門用語をどのように来館者に興味をもって理解してもらうかについて検討し，染織品に興味はあるが，どこに注目してよいかわからない，専門用語が難しいといった人びとを対象とした南アジアの特徴的な染織技術を紹介する「染織技術解説パネル」を新たに企画・作成した。

16枚のパネルには技術模型と南アジア各地で収集した実物をもちい，刺繍やアップリケの縫い工程，平織・綾織・繻子織の組織の違い，紋織や縫取織，綴織，絣織などの織技術，複雑な多色染めの工程などをとりあげた。

南アジア新展示場の「染織技術解説パネル」

5.「インデックス展示」

発表者は，染織に関する民族資料を観覧する際の指標となる「染織技術解説パネル」を展示場に設置することで，来館者が自ら理解を深めることができる仕掛けを指して「インデックス展示」と定義したい。このような「インデックス展示」に類似する展示は，日本国内では目黒区美術館など，海外ではイギリスのヴィクトリア＆アルバート美術館やインドのキャリコミュージアムなどでもみることができる。

これらと比較した場合，南アジア展示場の「インデックス展示」の特徴は，以下の５点をあげることができる。

1）展示場内での実物染織資料と「染織技術解説パネル」との比較が容易であること
2）実物染織資料および「染織技術解説パネル」の裏面をみることが可能
3）染織技術を支えてきた天然素材や道具，染材や助剤などの材料を提示
4）現地の製作風景写真を提示
5）現地の製作映像資料を提示

6．考　　察

1）物質文化研究における標本資料の位置づけ

民博は，文化人類学を中心とした博物館機能を持つ研究所である。文化人類学の研究は，現地社会でのフィールドワークを基礎とし，現地の人びととの対話を通じて民族誌を記述することが研究分野の礎となっている。該当社会で生産・消費・流通している物質を文化人類学は調査や研究の重要な対象とし，それらのものを物質文化という概念で捉えて，それらに関する記述や解釈をおこなってきた。

民博では，そのような研究において衣装や生活用具，儀礼具などを収集，保存，管理すると共に展示を通じて，研究者のみならず一般来館者に紹介してきた。つまり，南アジア展示における染織資料は，その社会を理解するためのツールであると同時に，物質文化研究の成果を共有する役割を担っている。

2）「インデックス展示」による染織文化への理解

南アジア展示の改修において，民族資料としての染織品や道具，技術理解を目的とした「染織技術解説パネル」，製作風景写真，くらしと手仕事の映像といった学術研究の成果である文化資源を活用した「インデックス展示」を構築した。南アジアの物質文化を多様なメディアを用いて，網羅的かつ立体的にとらえることが可能となる「インデックス展示」は，多くの来館者に物質をただの「もの」として鑑賞してもらうのではなく，それらの背景に興味を抱いてもらい，染織文化および対象地域の文化や社会への理解を深化させる効果がある。

3）「染織技術解説パネル」における通文化的応用

南アジアは染織のメッカともいえ，地理的環境，社会的背景からも多くの天然素材や多様な染織技術が存在している。南アジア展示の「染織技術解説パネル」は，世界の染織文化においても有用な汎用性のある内容となっている。

「染織技術解説パネル」は，一般来館者や染織愛好家，芸術系の学生や作家，研究者などが，民博の他地域展示場の染織資料においても，通文化として染織文化を比較するうえで意義のあるツールであるといえる。

注

1　南アジア展示プロジェクトチーム：三尾稔（チームリーダー），上羽陽子，杉本良男，竹村嘉章，寺田吉孝，豊山亜希，松尾瑞穂，南真木人，宮本万理，吉岡乾，染織技術解説パネル作成協力：朝岡工房，展示施工：株式会社フジヤ